

1943年の回教研究の「学術報告会」に先立つ時期、竹内好はすでに「大東亜共栄圏と回教圏」(『支那』東亜同文会編集部1942年7月)で、「宗教的特性として現世的」な「回教徒」は「東アジアだけに一億」存在し、それを真剣に考慮することなくして、「大東亜共栄圏の理想」完成は不可能との見解を示していた。旧国民政府は、国内統一のため回教徒にも中華民族たる自覚を吹き込もうと努めたが、この「単一民族論」は重慶政府に引き継がれた。その一方、満州事変によって日本の支配が確立して以降、「北支」には中国回教総連合会、「西支」には西北回教連合会が、ともに日本主導で結成され、ここでは「民族問題を表面に出さず」に、経済的・文化的地位の向上が目指されている。

竹内はこの日本の政策を「賢明」と評価し、また回教も「宗教である限り」「ある意味の後進性は免れない」とする。その一方で、自ら現地調査に当たった体験を生かした竹内は、日本人による回教徒啓蒙運動が、神社参拝の奨励ゆえに、現場で矛盾を露呈せざるを得ない様子にも、「訓練にあたっている一青年の述懐」を借りて言及してみせる(『北支・蒙疆の回教』『回教圏』1942年6月)。

当時、神社参拝とイスラームの信仰とをいかに両立させるかは、いくつかの議論を呼んでいた。「神祖 天の御柱の尊」をアッラーの神と同一視して、両者を無

理やり統合しようとする逆本地垂迹説の議論(有賀文八郎「日本に於けるイスラーム教」、田中逸平〔編〕『回教及回教問題』〔1935〕所収)もあれば、原正男の『日本精神と回教』(1941)のように、「日本精神」を国家意識と不可分とする一方、回教の絶対神は「靈的存在」と規定して、宗教と国家との衝突を回避しようとする詐術的な論理操作も見られた。

そうしたなか、竹内好もまた、時局柄ゆえか自己の見解は隠蔽しつつ、「回教」の高い順応性を大乘仏教の「寛容性」と類比して捉える紋切り型の議論に逃避してはいる。とはいえ竹内好が大川とともに「メッカを故郷として不断の交通を行う」回教文化圏の有様に、国家(nation)や民族(race)を超えた共同体の夢を垣間見たことは、否定できまい。その限りでは、「マレーに於ても又はジャワに於ても、宛も故郷に在ると同様」の「回教国 Dal al Islam」の観念を説明して「回教の世界征服」(中公新書版15頁)に言及する大川周明の『回教概論』序文は、竹内好にとって、国家を超えた宗教民族主義という、いわば禁断のユートピアのネガでもありえたのではなかったか。

*柳瀬善治「戦前期における〈回教〉をめぐる言説・研究序説」『近代文学試論』40号、2002年を参照させて頂いた。なお上に示した私見は、都立大学における研究会「大川周明のアジア主義と今日のイスラーム研究」(2005年2月28日)に於ける、筆者の発言に基づくことをお断りする。

大川周明『回教概論』の周辺

大東亜共栄圏におけるイスラームの位置づけをめぐって下

稲賀繁美

国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教員